

東日本大震災10年



第7部 荒浜っ子

家屋の残骸、へこんだ車が積み上がる。たんすや机などの家財道具も含まれたがれきを、重機が手際良く片付けていく。

仙台市若林区荒浜の阿部翔也さん(22)は、中学時代、津波で壊滅的な被害を受けた荒浜を訪れるたび、がれきの撤去作業を見守った。

現場の看板にあった青と緑のロゴが印象的だった。作業を指揮していた建設会社が「深松組(青葉区)だ」と後に知った。

「住んでいた地域をきれいにしてくれた会社に入り、恩返しをしたい」

仙台工高3年の時、同社の求人を見て迷わず応募した。面接で復興への熱い思いをぶつけて

命のとりで 校舎に感謝

就職。市沿岸部の東部復興道路など公共工事の現場管理を任されるまでになった。

震災時は荒浜小の6年生だった。クラスメートと校舎の2階にある家庭科室の掃除をしていた。

午後2時46分、強い揺れに襲われた。床のバケツの水がこぼれる。「教室に戻れ」。教師の指示で4階にある6年生の教室に急いだ。

海岸線に沿って南北に住宅が張り付く荒浜地区に高い建物はほとんどない。地域の人たちが、学校に続々と避難してきた。迎えに来た親と帰った児童もいた。

「津波が来るー」。屋上に駆け上ると、海側に黒い煙が見えた。バキバキと音を立てて近

づいてくる。校庭には避難途中のお年寄りがいた。「上がれー」。皆で大声で叫んだ。

学校の周囲を濁流が通過する。頻繁に遊びに行っていた友達の家が壊された。自宅のアパートがのみ込まれた。泣きながら見詰めるしかなかった。

周囲は海のようなだった。校舎で児童71人を含む320人が孤立した。3月11日午後5時半、自衛隊のヘリコプターで小さな子どもとお年寄りの救出が始まった。

辺りはすぐ闇に包まれた。校舎内から、火災が発生した仙台港の製油所の炎だけが赤々と見えた。児童2人に1枚の毛布が渡されたが、一睡もできなかった。「不安だったが同級生と一緒にだったから不思議と怖くはなかった」

阿部さんがヘリで救出された



のは翌日の午前5時ごろ。ヘリのライトが地面だったはずの場所を照らし出す。光が水に反射する。随分内陸まで浸水したことを知った。「何もかも終わった」と思った。

荒浜地区では約190人が亡くなった。自宅近くに住んでいた曾祖母の庄子徳子さん(当時87)も津波の犠牲になった。

学校に避難した320人は全員助かった。「命のとりで」となった荒浜小学校舎は、2017年4月に震災遺構として一般公開が始まった。

「校舎があったから自分は助かった。多くの命を救ってくれてありがとう」。荒浜小を訪れるたびに感謝の思いが湧く。「もし再び災害が起きるようなことがあれば、今度は自分が地域のために働きたい」。あの日体験を胸に業務に励む。

震災翌日、荒浜小の屋上からヘリで救出された阿部さん(2020年12月、仙台市若林区荒浜)